

佐賀大学理工学部同窓会会報No.2

理工学部の現状から今後 -教育と研究のバランスを考える-

理工学部部長 近藤道男

佐賀大学理工学部は、(1)理工融合(2)社会に開かれた大学(3)国際性を理念として、この三十数年間、国立大学でも数少ない理工複合学部としての存在感を強くアピールしてきた。今日では多くの国立大学の理学部と工学部は複合の大学院理工学研究科を組織化し、我々理工学部の理工融合の経験が広く参考とされている。

そこで理工学部の理念はどのように教育研究に取り込まれてきたか、今後の果たすべき役割について考えを述べる。

平成9年の理工学部の学部改変は、11学科を7学科に再編し、新設の機能物質化学科(旧化学科と工業化学科)および知能情報システム学科(旧情報科学科)を中心に再編新設して理工融合のブリッジをなす2学科と位置づけた。

この学部教育は、理学系から基礎科目、工学系から応用科目を提供し、学生にはそれぞれの科目をクロス履修させる「基礎に強い工学系」「応用に強い理学系」人材要請の強化が計られている。この教育システムを実効あらしめ、創造的で知性豊かな人間性を有する人材を育成し国際社会のハイテク化と公領域化に対応して、中堅として活躍できる技術者を世に送り出すことが当面の課題である。

このことに関連して、人間志向と環境福祉の観点から機械系、電気電子系、情報系の教員集団から編成した工学系研究科・独立専攻の「生体機能システム制御工学専攻」を平成10年度設置し、その成果を得ることができた。

わが国における科学技術の水準の向上は、大学教育プログラムにおいて大学院の充実・強化・多様化であり、かつ細分化された個々の領域における研究はそれらを統合・再編した総合的な学問との均衡を保った発展にある。

我々は、工学系研究科の教育目標として「人類の接続的成長を可能とする科学技術の創成」ならびに「人間優先の志向エンジニアの育成」を掲げた。広視野専門基礎重視型工学系研究科教育を実践するため、平成13年度の文部省概算要求で理工学部工学系研究科博士前期(修士)の再編整備を取り上げ、それが文部省の認めるところとなった(平成12年9月)。

今回は研究科前期課程に焦点を当て11専攻を7専攻に編成し、学部とのカリキュラムの継続性を図り、高度専門教育の基盤を強化する。それと同時に図1のようなシステム領域の中で専攻分野が自らの殻にとじこまることなく、基礎知識・基礎技術の公視野化を図るために周辺の専門分野との関りを系統的に学ぶことのできる専門領域コアカリキュラムを設計している。学生は他専攻に挑戦しダブルメジャーや転専攻のチャンスをものにし、「科学技術と倫理」、「環境と人間社会」などの共通科目と必修として人間優先志向の基礎概念を養う柔軟な教育プログラムを受けることになる。

この改組再編では、21世紀の循環型社会に適した人材育成を目指して「循環物質工学専攻」の新設を特徴としている。循環型社会におけるものの価値は、さまざまな要素が絡み合っている。環境負荷低減の要素技術として、たとえば省エネルギー、省資源、エコマテリアル、リサイクル、生分解素材、などがある。これらは、地球環境と共生を図る生産プロセスを求める企業・社会からの重要かつ緊急と要する要請でもあり、これをテーマとする循環物質工学専攻は機能物質科学専攻との共同で、社会の要請にこたえる学生の教育のみならず、リカレント企業技術者の実践的学習の場としての役割が期待される。

工学系研究科博士前期の改組再編は今後の博士後期の再編に継続される。その全体構想は、図1に示すように博士後期課程は物質生産科学専攻、情報システム科学専攻、環境循環システム工学専攻および、生体機能システム制御工学専攻の4専攻として、それぞれに特徴のある大講座を設計している。これは従来の専攻との統合性も考慮した柔軟な組織として学術研究のはなはだしい発展や社会経済の変化に対応できる幅広い視野と総合的な判断力を備えた高度な専門知識を有する人材の育成に寄与しうるものである。

教職員は、教育・研究の軸足の大小や強弱があっても、そのバランスを心がけてほしいと思う。脈々と流れる大学・学部の歴史を理解し、その基盤に立って従来のしがらみからの選別、脱皮を繰り返し、新たな知の再構築を教育・研究の場を実現してほしいものである。

個性を拓く理工学部の今後に明るい灯を確信している。(2000.9.19)

第2回菱実会総会開催の報告

去る平成12年5月27日(土)午前11時から、理工学部6号館多目的室において、第2回菱実会(理工学部同窓会)総会が開催された。あいにく激しい雨にみまわれ、会員の出席が危ぶまれたが無事に終えることができた。

秋永正幸同窓会会長の挨拶の後、平成11年度事業報告および決算報告、平成12年度事業計画案および予算案が審議され、承認された(記録は同窓会事務局で保存しているので、詳細は省略)。今回役員交代は無く、同窓会の情報化促進のため、新役員に渡辺健次君(S63・物)が組織担当に入った。その後、「楠葉同窓会積み立て基金の取り扱い」について、秋永会長から楠葉同窓会との交渉経過報告があった。本総会では、今後、理工学部同窓会の会員増強対策を集中的に行うことになった。会費納入者に対するメリットを明らかにして、会費納入率増加を図ることとなった。昼食後は、会場をパル21(「菱の実会館」竣工記念パーティ会場)に移し、他学部の同窓生とともに楽しい一時を過ごした。

積み立て基金の取り扱いで合意

平成11年8月28日に理工学部同窓会(菱実会)が楠の葉同窓会から分離独立して発足した時点から懸案となっていました積み立て基金について、楠葉同窓会と理工学部同窓会の各々の役員代表(会長を含む数名)の間で、数回話し合ってきました。

当初、楠の葉同窓会は、「今は毎年新入生からの同窓会費納入があるので、双方の同窓会は年度ごとの運営費はその年会費でまかなうべきで、積み立て基金は佐賀大学同窓会の発展に使うために分割すべきでない。」との意見でした。一方、理工学部同窓会は、積立金には理工学部卒業生の納入会費が含まれており、スタートしたばかりの理工同窓会には独自の活動資金が必要であること、また佐賀大学同窓会の発展に、理工学部同窓会として寄与、貢献をしていくためにも資金が必要であることなど基金の分割を主張してまいりました。

再三の協議の結果、お互いの主張を取りいれ、今後の両同窓会の友好関係を保つために理工学部同窓会役員会では、久間楠葉同窓会会長からの下記の提案に対し、合意する意向を固めました。

今後、積み立て基金設立の趣旨を良く理解した上で本会活動のために有効な活用を図っていきたいと考えています。同窓会諸氏に置かれましては、ご理解のほどをお願いいたします。

(会長 秋永正幸 S45・機)

平成11年6月

平成12年6月28日

理工学部同窓会 殿

佐賀大学楠葉同窓会 会長 久間善朗

楠葉同窓会の「別途積立金」の取り扱いについて

本年5月27日の総会において、別途積立金の取り扱いについて、別紙の資料に基づき、協議の上、下記のような方向で、理工学部同窓会との間で、早期決着を図ることが了承されました。

・別途積立金を下記のように処理する。
半分を楠の葉同窓会のうちの旧文理世代が寄与分としてあずかる。
残りの半分については、会員数で按分して、
理工学部同窓会 3割
楠の葉同窓会(経済卒) 2割
とする。

なお、積立金の本来の性格上、いずれの分についても、同窓会館の建設や事務局の運営、その他、同窓会活動や佐賀大学の「必要」に備えて、それぞれ、手をつけなくて、そのまま残しておくことが望ましいが、理工学部同窓会分については、会の発足間もないこともあり、分配後の管理のあり方については問わない。

退官にあたって

退官して思うこと

今岡保朗

私が佐大で教壇に立たさせていただいたとき、第一に思ったことは「この学生さん方を佛様からおあずかりしているのだ」ということでした。私語をする学生、追試を何回しても状態図が判ってもらえない学生、それは一人一人みんな違っています。でも、佛様は誰一人として要らない人間をこの世に送り出されたことはないのですから、自分の好き勝手に成績不良の学生を放り出すことはできないわけです。それは教師としての驕りなのだと思います。こちらも生身ですから努めても及ばない限界を、沢山経験させていただきました。しかし、佐大でお世話になった4年半に、会社人間として企業戦士として体を張って頑張った38年間では決してえられなかった尊い経験をさせていただきました。本当に感謝、感謝です。ありがとうございました。

佐大での尊い経験は、私に残りの人生に何をしたらこの世に恩返しができるのかを教えていただきました。今日葦原郵便局へ行きましたら、窓口の女性が佐賀市本庄町のお生まれの方で本当に懐かしく佐賀の話をして帰りました。佐賀大学のこと、佐賀のこと、私の懐かしい故郷です。佐大が大好きです。

略歴 /

S 57 東京電気化学工業(株)(現TDK) 入社
H 7 佐賀大学理工学部工業化学科 赴任
H 12 佐賀大学理工学部機能物質化学科 退官

20年前の思い出

植原 正行

私は、1977年秋から22年余を理工学部にお世話になりました。77、8年頃、まだ佐大では、寮問題で学生たちが学生部長を缶詰めにしたり、他大学の学生たちが寮に泊まり込んだりして、騒然とした雰囲気が残っていました。それでも、70年前後のような激しさはなく、理工学部では、教室対抗のソフトボールの試合をしたりしていました。

今はほとんど見かけませんが、学生も交えたソフトボールは良くやっていたように思います。先生方が若かったのでしょう。当時の元気な若い先生方が、今や、長老の教授になっているのです。学部の学生たちとの綱領も濃厚だったように思います。先生方の若さの生ばかりでなく、院生があまりいなかったのも、直接、学部生を相手にしていたことが大きな理由だったのでしょうか。博士後期課程もある現在では、先生方のまわりには、ほとんどが院生になってしまいました。

今、大学が大きく変わろうとしています。20才前後の若者を中心とする大学教育の大切さは変わらないと思います。目先の効率や市場原理的発想ではなく、この国の学問や文化のあり方に心してよりよい大学を目指してほしいと思います。

略歴 /

S36 大阪府立大学工学部 赴任
S41 九州大学理工学部 赴任
S52 佐賀大学理工学部物理科 赴任
H12 佐賀大学理工学部物理科学科 退官

緑の館

白濱 啓四朗

理工学部在勤30余年の間に数多くの来客を迎えた。その中の幾人もの方が「この大学は緑があっていいですね。」と挨拶された。私は素直にこれを喜んだ。大学正門に続く道路(縄手通とか何か名前があってもいい)の示す四季折々の顔は同窓生諸君のまぶたにしっかりと保存されているだろう。歩を理工学部に進めると、背の高いワシントンア椰子が南国ムードで歓迎してくれる。

私の研究室は本館中棟2階にあった。そこから見える中庭は理工学部でも一番古いもので、4階にも及ぶ高さに成長したカエデやその他の木々で豊かな緑の空間を構成している。私は折りにふれ仕事の合間に視線をそこに休ませたものだ。ここにはある留学生在が大学を去るに際して勝手に植えた山茶花が一本育っている。

本館南棟の南側通路は桜並木である。4月、卒研配属が決まると、学生たちの研究室生活はお花見から始まった。他の先生方のグループの車座も散見された。本館東側のサツキもよい。誰かが何時刈込むのか角張った生け垣が理工学部の境界線だ。季節には彩りが添えられる。屋上からの眺めもよい。そこからの花見も再三楽しんだ。緑の話題は挙げればきりがないが、DC棟など新しい建物の周辺の植生環境はちょっと寂しい。時の氏神の協力も必要なのだろう。現在、もっと背の高い建物が完成しつつある。その足元にアイビーのたぐいを植えて、どれくらい高く登るか実験してみたいところだ。大学当局も野暮は言うまい。

ヒトは森から出て、歩き始め文明に至ったと習った。我々に緑が必要なのはDNAレベルにまで遡れる根深いものだ。「火の文明」も過ぎたるは反省の要がある。温暖化対策に地球緑化は根本治療方である。せめて理工学部周辺に緑深い環境を育成し、学生諸君は落ち着いた雰囲気の中で勉学し、思い出深い青春の日々を過ごしてもらいたい。

同窓会としても緑間にベンチ(パリの公園にあるようながっちりとした鉄の鋳物製)を置いて「科学の小道」を造ったり、木々の名札をつけたりで側面からの協力もお願いしたい。この緑の館から世に問う、時には歴史に残る偉大な研究が出ることを夢みている。

略歴 /

S 39 山之内製薬(株)中央研究所 入社
S 43 佐賀大学理工学部科学科 赴任
H 12 佐賀大学理工学部機能物質化学科 退官